

## 看護学生の感動体験の考察と、その思考過程の検討 －在宅看護実習後のレポートから－

小森直美\*, 藤岡あゆみ\*, 小路ますみ\*

### Review of Impressed Experience of Nursing Students, and Investigation of Thinking Process through the Impressed Experience : From Reports of Home Care Nursing Training

Naomi KOMORI, Ayumi FUJIOKA and Masumi SHOJI

#### 要 旨

看護学生の在宅看護実習後のレポートから、感動を受けた場面とその思考過程が明確に記述された5場面を抽出し、看護学生がどのような場面から、どのような考察をし、そして、どのような思考過程を辿ったかを明らかにすることを目的に、質的・帰納的に分析した。

結果、在宅看護実習の訪問看護活動の場面を通して、看護学生の3つの感動体験が考察された。その3つの感動体験とは、「療養者の障害や後遺症等を克服しようとするひたむきな姿から動機づけに関連した感動体験」や、「療養者・家族が支えあう家族間の深い絆から認知的枠組みの更新に関連した感動体験」、「訪問看護師が療養者を気遣う配慮から他者志向・対人受容に関連した感動体験」であった。

また、看護学生は、訪問看護活動の場に感情移入することによって、机上の学習による暗黙知から、身体・五感を駆使した共有・共感を獲得し、レポートとして言語化することによって概念化され、形式知となって創造されると考えられた。それが、さまざまな看護観を育む思考過程のひとつとなっているのではないかと推察された。

キーワード：在宅看護実習、看護学生、感動体験、思考過程

#### 緒 言

在宅看護は、平成9年度より新しく看護師課程のカリキュラムに加えられ、11年が経過した。在宅看護がカリキュラムに加えられた背景には、健康問題を抱えた療養者が、生活の場である在宅で過ごしたいという希望を持ち、医療機関で行われていた看護が、療養者の自宅で必要となってきたことにある。

近年、在宅移行支援から看取りまで一貫した在宅ケアの推進や、後期高齢者に対する医療も視野に入れた、より一層の在宅看護の充実と適正な評価、地域連携体制の整備と評価が求められている。これら在宅看護を取り巻く状況は、看護系大学における在宅看護教育の充実化をも求め、各看護系大学は在宅看護実習における看護学生の学びとして明らかにし

てきている。しかし、その看護学生の学びが、在宅看護実習中のどのような場面からか、また、どのような思考過程を辿ったかを明らかにした論文は少ない。

そこで、今回は、看護学生の在宅看護実習後のレポートから、感動を受けたと記述しているものに焦点を当てて考察した。①どのような場面から看護学生は感動体験しているか、②その感動体験から看護学生はどのような思考過程を辿り、③結果、看護学生は何を学んだのか、を明らかにすることによって、在宅看護教育の一貫として実施している在宅看護実習の、より一層の拡充ができると考え、そのためには、看護学生が在宅看護実習における具体的場面の事例から、看護学生自身の考察が求められていると考えた。

結果、訪問看護師、療養者、家族らから、多様な

\*福岡県立大学看護学部家族在宅看護学講座  
Department of Family & Home Care Nursing  
Faculty of Nursing, Fukuoka Prefectural University  
連絡先：〒825-8585 福岡県田川市伊田4395番地  
福岡県立大学看護学部家族在宅看護学講座 小森直美  
E-mail:komori@fukuoka-pu.ac.jp

感動を受け、さまざまな看護学生自身の場面考察があり、看護観を育てている思考過程を捉えることができたので、ここに報告する。

感動体験という言葉は曖昧な言語であるが、看護学生の行動を積極的に方向づける源には、このような感情の体験が潜んでいることが多く、このような感動体験を明確化することは有意義なことであると考えた。

## 目 的

看護学生の在宅看護実習後のレポートから、感動を受けたと記述しているものに焦点を当て、看護学生がどのような場面から、どのような考察し、そして、どのような思考過程を辿ったかを明らかにすることを目的とする。また、訪問看護師、療養者、家族らから、多様な感動を受け、さまざまな看護学生自身の場面考察があり、看護観を育てている思考過程を明らかにする。

## 実習の概要

### 1. 実習目的

在宅療養支援における在宅看護の機能・役割およびその特性を理解し、在宅看護のあり方や課題について学ぶ。

### 2. 学習目標

- 1) 訪問看護の実践を経験することによって、日常生活の支援に係る在宅看護の理解を深める。
- 2) 地域の中で生活する療養者とその家族を総合的にとらえ、療養者とその家族が抱える問題をアセスメントし、問題解決能力を養う。

### 3. 実習施設

訪問看護ステーションならびに病院訪問看護部 9施設。

### 4. 実習期間

平成19年12月3日から14日まで。

## 研究方法

### 1. 用語の定義

「感動」とは、情動的に心が動かされる状態のことである(戸梶, 2001)。また、戸梶(2004)は、感動体験には、ネガティブ事象と、ポジティブ事象に分けられると述べているが、今回、看護学生の在宅看護実習における感動体験ということに重きを置き、

肯定的、否定的のいかに関わらず、感動体験と位置づけた。そして、感動体験の考察には戸梶(2004)の3つの感動効果、思考過程の分析には、野中(2006)らが明らかにしている知識創造理論を用いた。

### 2. 研究対象者

平成19年12月3日から14日までの在宅看護実習を終了した3年次看護学生20名。

### 3. 研究材料

在宅看護実習を終了した学生のうち、研究の趣旨と概要を説明し協力が得られた学生20名に対し、テーマ「在宅看護実習において感動した場面」について、レポート提出を求めた。レポート20枚、約7180字から、感動した場面に関するデータから、看護学生自身の考察と、思考過程が明確に記述された5場面を抽出し、言葉や文脈を損なわずに、研究目的に沿って質的・帰納的に意味の本質を取り出す方法を用いた。なお、全体の文脈を掴むために、研究者3名で記述内容を何度も繰り返し読み、その場面考察と、思考過程を分析した。

### 4. 倫理的配慮

倫理的配慮として、研究の目的・方法、本研究の参加の有無が、成績や今後の学習過程において影響がないことを口頭で説明し、了承を得た。また、研究内容に同意し、且つ、レポート提出した学生のみを対象者とした。尚、研究によって得られた内容は匿名性を保ち、結果から個人が特定されないようにプライバシー保護に努めた。

### 5. データの確からしさ

この研究方法において、常識や先入観、知識、習慣など、その意味の本質に関わりあっているものへの当てはめを避けるために、研究者3名の討議によって進めていった。また、分析方法については、看護学者のスーパーバイズを受けた。結果が信頼できるものかどうか、研究対象者への確認作業も行った。

## 結 果

各場面の現象から、看護学生が、(1)どのような場面に遭遇し、(2)どのように考察したか、(3)結果、何を学んだかに区分できた。[表1]

### 場面 1

(1)「在宅看護実習中、寝たきりであった療養者E氏が、自分のサービス担当者会議がE氏宅で実施された際、車椅子に座っていた姿に驚いた。そのE氏は、

表1 看護学生が、在宅看護実習で感動を受けたとする場面と思考過程

対象者	看護学生が感動したと記述している場面	看護学生が考察した内容	看護学生が学んだと記述している内容	何を学んだか
場面1 療養者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・寝たきりの状態にあったE氏が、サービス担当者会議の際、車椅子に座っていた (寝たきり状態の利用者が座位になっている場面)</li> <li>・会話困難なE氏が、問いかけや文字盤を使うなどして、最後まで諦めず何かを言いたいと強く訴えていた (発語困難者が何かを訴えようと努力する場面)</li> <li>・会話困難なEさんが、みんなを笑わそうと冗談をいっているのがあった (発語困難者が周りに笑顔を与えようとする場面)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・療養者は、自分のサービス担当者会議に参加したいという思いがある</li> <li>・妻は、日ごろからEさんに寄り添い、明るく話しかけ、なにを伝えようとしているのかをきちんと理解しようとしていたからではないか</li> <li>・妻と療養者、夫婦相互にパワーを与え合い、分かち合っているのではないか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者を取り巻くスタッフの関わり方の影響力が大きいことがわかった</li> <li>・人は周りの環境によって、いつまでも自分らしくいることが可能なのだということがわかった</li> <li>・普段の自分の友人関係、家族関係でも同じことが言え、対象者と接する上で重要なことだと学んだ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・療養者の姿から、訪問看護師の利用者・家族に対する関わり方</li> <li>・療養者が困難を乗り越えようとする姿を学んでいる</li> <li>・自分自身も努力しなければならぬと内省することを学んでいる</li> </ul>
場面2 訪問看護師 療養者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・訪問看護師が、「療養者さんが、ここが痛いついたら、そこをさするし、さびしそうな顔をしていたら背中をさする。触つてわかることが沢山あるし、触られることで利用者の心が救われることだってある」という話をしてくれた。「実習やけ、緊張しとるやろ」と声をかけてくださった一言、一触に感動した (訪問看護師が言葉や手で療養者に触れている場面)</li> <li>・受け持ち療養者が学生の私の手をさすってくれた (学生自身が療養者に受け入れられたと感じた場面)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・触る手と言葉にぬくもりがあって、訪問看護師がどれだけ深い思いがあるのかということがわかった</li> <li>・愛がある言葉を話しているし、ぬくもりやユーモアのある看護師であると感じた</li> <li>・受け持ち療養者の手のぬくもりから、受け持ち療養者に自分を受け入れてもらったと感じた感覚があった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護は、人間の力で、人の温かさを感じ、感動を与えることができることを学んだ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・訪問看護師の言葉と触るという行為から、看護の中にある人としての温もりを学んでいる</li> <li>・療養者が看護学生に対して手をさすするという行為から、受け入れられるという気持ちを学んでいる</li> </ul>
場面3 療養者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気管切開をしている療養者が、「またくるね」という問いかけに対して瞬きをして返事をした瞬間、瞬きや、開眼、見つめることで人に気持ちを伝えていることがわかった (まばたきによってコミュニケーションをとっている療養者に気づいた場面)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族や看護師、介護福祉士が、まばたきを理解してコミュニケーションを行い、ケアを行っていた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何気ないその人の行動に気持ちが動くことを学んだ</li> <li>・言葉で話せない人は、体で表していることを見落とさない看護師になりたいと感じた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・療養者のわずかな反応を見抜くという場面から、訪問看護師の洞察力を学んでいる</li> </ul>
場面4 家族	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体を動かすことも、発語も困難な療養者宅に、壁に「悩みのない人間なんていない。〇〇は不幸じゃない。〇〇には家族がいる。」と書いた文章が貼られていたものを見たときに感動した (家の中の貼り紙を見た場面)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・療養者・家族が疾患を持ち、寝たきり状態で生活していくことや介護していくことは辛く大変なこともあるが、その苦しさ以上の幸せが得られることを知った</li> <li>・療養者が中心的存在となり、介護をしていくことで絆が深まっている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・障害を持って生活することのイメージが変化した</li> <li>・介護をうける側も行う側も相互に支えあい、お互いの愛情を感じながら生活している</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・障害のある療養者を支える家族の姿から、家族・療養者間の絆と愛情の深さを学んでいる</li> </ul>
場面5 訪問看護師	<ul style="list-style-type: none"> <li>・在宅療養中に入院になった療養者のお見舞いについていた訪問看護師が「気になるというもあるけど、在宅では自分を心配して待っていてくれる人がいる」と思ってもらうことも大事だと思うといっていた (訪問看護師が入院中の利用者を見舞う場面)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・在宅看護の場は、居室を訪問することだけに限らないということ知った</li> <li>・訪問看護師の利用者に対する思いやりの気持ちを知った</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手を思いやるというのは、自分が相手の立場になって考え、行動することである</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・療養者を見舞う訪問看護師の行動から、相手を思いやるということはどういうことなのかを学んでいる</li> </ul>

発語困難者であるにもかかわらず、文字盤を使ったり、周囲の問いかけによって、最後まで諦めず何かを伝えたいと強く訴える姿を観た。その伝えたかったことが、周囲の人々への冗談をいっているのがあったことを知り、もっと感動した」と記述している。

(2)看護学生は、「寝たきりである療養者も、自分のサービス担当者会議に参加したいという思いが強いこと、また、妻が日頃からE氏に対し、明るく話し

かけ、何を伝えようとしているのかを理解しようとしているからではないか」と考察し、それは「妻と療養者が、夫婦相互に支えあい、分かち合っているからだ」と考察している。

(3)この場面から、看護学生は、「療養者を取り巻くスタッフの関わり方の影響力が大きいことと、人は周囲の環境によって支えられることで、いつまでも自分らしくいることが可能なのだと学んだ」と記述している。



## 場面2

(1)「病院入院中、認知症による問題行動が多かった療養者A氏が、在宅へもどり、少しずつ自分を取り戻してきていた。在宅看護実習中、受け持ち療養者としてさまざまなケアを行った。実習最終日、今日が最後の実習日であることを告げると、受け持ち療養者から看護学生の手をとってさすってくれたことに驚き、感動した。」と記述している。

(2)「受け持ち療養者の手のぬくもりから、受け持ち療養者に自分を受け入れてもらった」と考察している。また、訪問看護師が、「『利用者さんが、ここが痛いといえば、そこをさするし、さびしそうな顔をしていたら背中をさする。触ってわかることが沢山あるし、触れることで療養者の心が救われることだってある』と話をしてくれた、訪問看護師の看護の賜物だ。」と考察している。「触る手と言葉にぬくもりがある訪問看護師が、どれほど深い思いを抱いて看護をしているのかということがわかった。」と記述している。

(3)更に、「看護は、人間の力で人の温かさと感動を与えることができることを学んだ。」と記述している。

## 場面3

(1)「気管切開をし、脳梗塞後遺症で動くこともできない療養者が、『またくるね』という問いかけに対し、まばたきをして返事をした。まばたきや、開眼、見つけることで、人に気持ちを伝えていることを知り、感動した。」と記述している。

(2)「家族や看護師、介護福祉士は、まばたきの意味を理解してコミュニケーションをとり、ケアを行っている。また、受け持ち療養者が、私に何かを伝えようとしてくれていることがわかった」と考察している。そして、「目や表情の変化でコミュニケーションをとることができることを学んだ。相手の伝えようとしていることを、たとえ理解できなくても理解しようとする心を持って接することが大切である」ということを学んだ。」と記述している。

(3)また、「何気ないその人の行動には気持ちがあること、言葉が話せない人は体で表していることを見落とさない看護師になりたい。」と記述している。

## 場面4

(1)「身体を動かすことも、発語も困難な療養者宅の壁に、『悩みのない人間なんていない。〇〇は不幸じゃない。〇〇には家族がいる。』と家族が書いた

文章が、療養者・家族が見える場所に貼られていたものを見たとき、感動した。」と記述している。

(2)「疾患を持ち、寝たきり状態で生活していくことや介護していくことはつらく大変なこともあるが、その苦しさ以上幸せが得られることを知った。また、療養者が中心的存在となり、介護していくことで絆が深まり、介護を受ける側も行う側も相互に支えあい、お互いの愛情を感じながら生活している。」と考察している。

(3)「家族・利用者間の絆と愛情の深さを学んだ。」「障害を持って生活することのイメージが変化した。」と記述している。

## 場面5

(1)「在宅療養中に入院になった療養者のお見舞いに行っていた看護師が『気になるということもあるけど、在宅では自分を心配して待っていてくれる人がいると思ってもらうことも大事だと思う』と言ったことに、感動した。」と記述している。

(2)「在宅看護の場は、居宅を訪問することだけに限らないということを知った。また、訪問看護師の療養者に対する思いやりの気持ちを知った。」と記述している。

(3)「相手を思いやるというのは、自分が相手の立場になって考え、行動することであると学んだ。」と記述している。

## 考 察

感動体験として抽出された5場面から、「誰から感動を受けたのか」感動を受けた対象者ごとに、【療養者】【家族】【訪問看護師】と、3つに区分した。その3つの対象者ごとに考察した。

### 1. 看護学生が【療養者】に感動を受けたとしている3場面：「療養者の障害や後遺症等を克服しようとするひたむきな姿から動機づけに関連した感動体験」

場面1に関しては、寝たきりで発語困難という状態にある療養者が、自分自身のサービス担当者会議に臨む姿勢に感動を受けている。しかし、寝たきり状態である療養者を起こし、車椅子に移乗させ、サービス担当者会議への参加を促したのは訪問看護師であり、看護学生の記述にもあったように、療養者・家族を取り巻くスタッフの関わり方の影響力が大きいことが背景にあると推察できた。

看護学生は、療養者が「寝たきり状態である」「脳

「梗塞後遺症によって動けない」という、ネガティブな視点から療養者を見ていることから始まっていることがわかった。その療養者が、困難を克服しようとする姿勢や態度によって看護学生の中に驚き生まれ、その驚きが感動につながっていることが推察された。

樋口ら（2003）は、学生は、疾病や障害を持ちながら家庭で自分らしい生活を望む人々への訪問看護活動を通じて、在宅看護の特有さの理解と共に、看護とは何かを考え、看護観を築く意味をもっていると述べている。

また、加藤ら（2003）は、在宅看護は病院とは異なり、生活を構成している空間と時間的流れにすっぽり包まれて展開し、生活空間のすべてが自分を取り戻させ、疾病や障害に立ち向かっていく意欲を湧き出させてくれると述べている。

すなわち、訪問看護活動によって、療養者が、障害や後遺症を持ちながらも、前向きに生活している姿から、看護学生は自分なりの看護観を築いている可能性があること示唆され、「人は周囲の環境によって支えられることで、いつまでも自分らしくいることが可能なのだ」と、看護学生が看護観を記述する過程に至ったことが考えられた。

場面2に関しては、病院入院中、認知症による問題行動が多かった療養者A氏が、在宅生活と訪問看護活動によって、少しずつ自分自身を取り戻してきていたことに、感動をもたらした基点があると考えられた。

訪問看護師の見守りの中、受け持ち療養者としてさまざまなケアを行っていったこと、実習最終日であったことなどから、受け持ち療養者から看護学生の手をとってさすってくれたことにつながったとも推察できた。そして、この行為を通して、看護学生は、訪問看護師から療養者が受けた行為ではないかと考えていることが推察された。「利用者さんが、ここが痛いといえば、そこをさするし、さびしそうな顔をしていたら背中をさする。触ってわかることが沢山あるし、触られることで療養者の心が救われることだってある。」と話をしたことを、看護学生が記述の中に引用していることからいえる。

すなわち、看護学生が記述しているように、訪問看護師と療養者のかかわりの中から生まれた受け持ち療養者の行為であり、この場面から、看護学生は、「看護は、人間の力で人の温かさや感動を与えるこ

とができる」という看護観の記述につながっていると考えられた。

場面3に関しては、気管切開をし、脳梗塞後遺症で体動困難な療養者が、「またくるね」という問いかけに対し、まばたきをして返事をしたという気づきから始まっていることが記述されている。

まばたきや、開眼、見つめることで、人に気持ちを伝えていることを知り、後遺症をもった療養者にも、意思表示というコミュニケーション能力をもった療養者に感動していることが考えられた。そして、家族や看護師・介護福祉士は、まばたきを通して、コミュニケーションをとり、ケアを行っていることに感動を受けている。また、まばたきを評価し、まばたきの意味を理解しているケア・チームの能力にも、感銘を受けていると推察された。受け持ち療養者が、学生自身にも何かを伝えようとしてくれることが伝わったとき、更に、感動を受けたと考察している。そして、相手が自分自身に何かを伝えようとしていることを、たとえ理解できなくても、その人、その行為、その意味を理解しようとする心を持って接することが大切であるということを学んだと発展させ、また、「何気ないその人の行動には気持ちがあること、言葉が話せない人は体で表していることを見落とさない看護師になりたい」という学生自身の看護観の形成につながっていることが推察された。

これら3場面は、療養者から感動を受けたと区分しているものの、療養者・家族を支える背景には、訪問看護師の働きかけや関わりが大きいことを示していると考えられた。

戸梶（2004）が述べている感動の理由として、主に驚きを伴ったもの（意外性・驚き、発見、初体験、希少性、予期せぬ好転など）が多く、予想外のことや新しいことに関して感動が喚起され、それを契機に何らかの変化を生じているとしている。今回の、看護学生の感動体験は、寝たきり状態である療養者が車椅子に座っていたこと、認知症の療養者が看護学生自身を気遣ってくれたこと、気管切開で体動困難な療養者がまばたきで会話してくれたことに、看護学生は感動を覚えていることから、驚きを伴った場面が感動体験を生んだ理由として考えられた。

また、戸梶（2004）のいう、動機づけに関連した感動は、他者の苦勞・努力する姿に遭遇した場合には、感動喚起モデルのプロセスに含まれる個人の存

在理由と結びついた潜在的な願望である「ヒーロー／ヒロイン・スキーマ」が活性化されるため、動機づけが高まるとしている。つまり、療養者のひたむきな姿に注目し続ける中で、看護学生は、療養者がそれぞれの目標に向かって、自己の存在を示すために頑張ることの必要性について気づかされ、自分もやらなければいけないということに内省する機会となると考えられた。

## 2. 看護学生が【家族】に感動を受けたとしている

### 1場面：「療養者・家族が支えあう家族間の深い絆から認知的枠組みの更新に関連した感動体験」

場面4に関しては、体動困難、発語困難な療養者宅に訪問した際、壁に「悩みのない人間なんていない。〇〇は不幸じゃない。〇〇には家族がいる。」と、家族が書いた文章が、療養者と家族に見える場所に貼られていたことに感動を受けている。

家族・療養者は、家族の一員である療養者を介護するとき、辛かったり、苦しかったり、悲しかったりする気持ちを克服する必要がある、それらのネガティブな感情がわきあがったときに、その貼られた文章を見て、家族が療養者に応援を送っていることと、家族自身が自分自身に言い聞かせているとも推察できた。その家族・療養者の感情を感じ、看護学生は、後遺症や障害・慢性疾患を持ち、寝たきり状態で生活していくことや介護していくことは、辛く大変なことであると考察しているのではないかと考えられた。

富安ら(2007)は、家族と直接かかわる経験が少ない学生にとって、家庭という生活の場に向いて、家族介護者に直接触れる体験は、家族の存在の重みや、在宅療養を継続するための家族介護者への支援の重要性を認識する機会となると述べている。

ネガティブ感情を克服しようとする家族・療養者に対して看護学生は共感し、「家族間の深い絆」として学んだと記述していることが推察された。

戸梶(2004)は、他者志向・対人受容に関連した感動については、愛情・思いやりを感じたという内容が共通すると述べ、思いやりを感じるには、不安な状態に置かれている、孤独だったという前提条件があると述べている。つまり、看護学生は、在宅看護実習の中で、在宅療養を送る療養者の辛さや苦しみ、悲しみ、孤独等の思いを、家族の愛情や、思いやりと接することによって、柔和な気持ちを生み出し、受容できるようになったと考えられた。

## 3. 看護学生が【訪問看護師】に感動を受けたとしている1場面：「訪問看護師が療養者を気遣う配慮から他者志向・対人受容に関連した感動体験」

場面5に関しては、在宅療養中に入院になった療養者の見舞った訪問看護師が、「気になるということもあるけど、在宅では自分を心配して待っていてくれる人がいると思ってもらうことも大事だと思う」と言ったことに、感動したと記述している。

看護学生は、入院している療養者を見舞うのは家族や親族、友人であると考えていたことが推察された。つまり、訪問看護師が入院中の療養者を見舞うということが看護学生の前提になかったことを示している。その行為が、在宅看護の場は居宅を訪問することだけに限らないということを知ったと記述していることにつながっていると推察された。

また、なぜ入院中の療養者を見舞ったのかという質問の答えとして、疾病をもちながら在宅生活を送るためには、在宅生活にもどるという目標をもつことの大切さを学んでいる。療養者を待っている人がいるという気持ちを与えようとしている訪問看護師の配慮に出逢ったことが、療養者に対する思いやりの気持ちを知ったという記述につながっていると推察され、その思いやりの気持ちを感じとった看護学生は、看護学生自身の看護観として、「相手を思いやるというのは、自分が相手の立場たって考え、行動することである」とする記述につながるものが推察された。

戸梶(2004)は、認知的枠組みの更新に関連した感動として、今までに知らなかった考えや価値観との遭遇や経験は、それまでに生きてきて築き上げた考え方や価値観に対して大きな動揺を引き起こし、それが納得のいくものであったときに、感動に至ると述べている。つまり、訪問看護師が、入院した療養者を見舞い、療養者が在宅にもどることを待っているということを伝えるということに対して、新しい考え方や価値観を獲得し、看護学生が受容する過程で感動に至ったと考えられた。

## 4. 5場面から捉えられた看護学生の思考過程

野中ら(2006)は、人間の最も根底にある喜怒哀楽の感情の知を直接的に共有する場づくりの能力が共有能力であるとし、場とは、「共有された動的文脈」であり、場の参加者が知を共有・創造する基地(ベース)となる動的な心身の状態である。それが成立するためには、個人が自己を超えて他者と結び



つく、ケア、愛、信頼などの社会資本を創発させる場をつくり、それを動かし、そして複数の場を重層的に結び付けていく能力が基本となる。そのためには、相手の立場に立ち他人の感情を理解することができる、いわゆる共感する能力が必要となる。他者の気持ちや立場、あるいは自己の行為の結果やその意味をどこまで推し測れるかという想像力である。また、他人に影響を及ぼすには、相手を理解し、相手の共感を引き出すと同時に自分に共感させることが必要である。この能力は人を動かす能力につながると述べている。

また、野中ら（2006）は、知識創造理論として、暗黙知と形式知の組み合わせから「共同化」「表出化」「内面化」「連結化」の4つの考え方を提示している。

これら5場面から観えてきたことは、看護学生は、療養者・家族が、訪問看護活動を受けながら、生活をし、さまざまな困難を乗り越えようとする場の中にいて、感動を受けている。その感動は、看護学生の中にある療養者・家族に「共感・共有する」という能力ではないかと考えられた。

すなわち、看護学生は、在宅看護実習経験を通じ、訪問看護活動の場に感情移入することで、机上の学習による暗黙知から、身体・五感を駆使した共有・共感を獲得する。そして、言語化することによって概念化し、形式知となって創造されているのではないかと考えられた。

そして、訪問看護活動に、看護者の思いやりの気持ちがあることが、看護学生自身に伝わることで、そのような訪問看護活動から看護とは何かを考え、知識の体系化（分析）が確立されていることが推察された。看護学生は、その場面の中にいて自分自身の心が動かされることが感動体験となり、その感動を与えた訪問看護師に憧れ、その人のようになりたいたいと感じることが看護観の形成に結びつく、ひとつの過程であると考えられた。

## 結 語

在宅看護実習の訪問看護活動の場面を通して、看護学生の3つの感動体験が考察された。その3つの感動体験とは、「療養者の障害や後遺症等を克服しようとするひたむきな姿から動機づけに関連した感動体験」や、「療養者・家族が支えあう家族間の深い絆から認知的枠組みの更新に関連した感動体験」、訪問看護師が療養者を気遣う配慮から他者志向・対

人受容に関連した感動体験」であった。

また、看護学生は、訪問看護活動の場に感情移入することによって、机上の学習による暗黙知から、身体・五感を駆使した共有・共感を獲得し、言語化することによって概念化され、形式知となって創造しているのではないかと考えられた。それが、さまざまな看護観を育む過程のひとつとなっていると推察された。

## 本研究の限界

本研究は、看護学生が感動を覚えたレポートから、影響を受けた場面を考察し、看護学生の思考過程を検討したものであるが、より一層の在宅看護実習の拡充を目的とするならば、看護学生が困難を感じた場面や疑問を抱いた場面の考察も必要となってくる。今後、これらの課題に取り組むことが求められていると考える。

## 謝 辞

看護学生が、これらの深い学びをさせていただいている背景には、訪問看護ステーションおよび病院訪問看護部の、訪問看護師の皆様と、療養者・家族の協力のおかげであり、深謝したいと思います。

## 引用文献

- 樋口キエ子、臺有桂、若佐柳子。（2003）. 在宅看護実習における学び 訪問看護実習まとめの記録分析から. *順天堂医療短期大学紀要*, 14, 85-94.
- 平尾恭子、山田和子、熊谷幸恵、前馬理恵、堀内恵美子。（2005）. 在宅看護実習におけるQOLを考慮した看護活動に関する学び. *和歌山県立医科大学保健看護学部紀要*, 1, 71-78.
- 加藤基子編著。（2003）. *訪問看護をささえる心と技術*. 東京：中央法規, 11.
- 野中郁次郎、遠山亮子責任編集。（2006）. *知識創造 経営とイノベーション*. 東京：丸善株式会社.
- 小路ますみ、小森直美、笹尾松美。（2007）. 在宅看護実習における学びの構造. *福岡県立大学看護学部紀要*, 4 (1), 10-18.
- 戸梶亜紀彦。（2001）. 『感動』喚起のメカニズムについて. *認知科学*, 8 (4), 360-368.
- 戸梶亜紀彦。（2004）. 『感動』体験の効果について - 一人が変化するメカニズム -. *広島大学マネジメント研究*, 4, 27-37.

富安真理, 鈴木みちえ, 長澤久美子, 蒔田寛子, 藤生君江. (2007). 在宅看護論における家族支援に関する学習効果の検討－学生の家族支援の認識に焦点をあてて－. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 15, 35-43.

渡辺良子, 船越利代子. (2007). 在宅看護論実習における学生の学び. つくば国際短期大学紀要, 35, 141-156.

受付 2008. 5. 29

採用 2008. 9. 22